新体詞華ひなのかゞみ　美ぬか

本間文庫
文庫14
A 33

文庫14
A33

新作詞華 ひめかゞみ

東京 夏妖[illegible]人 著

第一面

蛙が伏屋の禪の琴の音たえても湿る涙かな。

降りゆく身との歎きて刈り寄する赤子女

流石に晶よりゆふ人さく名子

夜をまぶたく夏の夜ねども、

夏の月はや中空に掛るころ、

針子編みる席にも[illegible]おちる宿の[illegible]

やと浄元なく剥落ちく、滑戸の刈麦明けそえて、

嬉しくおなで

一つの戸の闇るる楓と楢の梢まく

果てられぞも開ける

りすもて羽根も出代わる

衣ぞ復せる袖

垣の うずすふる初見草 時めく白子二三

つがえし蓄なつよ々

名残るて、岡のべこの菊さてゞる子

荒布まにある別衣

京むさ匠まて楓と蕨 あるまて入れどそれ衣る

親子のきて

水入らずだ。　　も

さく事も弱々だ。操まれしこともなく、気のよきも、目をつける縁の気

も飯櫃の角もなくなるを身に附ける　地合も厚く、柳も霞き　送りたれど、一　交友と人胸

昔めて法堂の　実にと云ふ　曇りや　沼くるに似たる其の

中の沼子漂ふ按上舟　決果て[illegible]身るると　世の様にて

白衣の帆もあらぬ室内、　逸る世子最も　蝶も史

的する也る　三人の人の様いかに。　角も気く按し越して、其の

円くかけたる食卓の　こゝろ橋子住ひたる　百歩計の方

ことにて、それも向け気の　算もせず好みらねど、[illegible]

あるよう[illegible]常の　男の僕より　隠れ見る　[illegible]

なまこの帆子常に体を置きて　異く気子　友あるな

仁田山の木綿の、麻の、綾に　光くも絶えて　その女房子

あれらの一人の若女子て、年の頃十余なる處や、こともなくて手

こゝろ、顔立もできる人、常の婦人がかれの満ちし

かく、顔そして殿有りるのある。　総て一人を向きて、

可愛ら笑ちつ子、横様子撫して大の　影言われて、笑

鬢まで最新明らにれつ、腿の肉　累白い　ふみて押つし身の

態もまたの　と　拾尋ねる追るのう、二個ばかり鋭めるる

指の　鍾せのある　指環まで

爪の◎◎。もて拭はず、二◎ばかりの◎の母　迷は有らじと見

大きさ

られゐる。食に類の色を　紅梅まで見えざるを　其の顔

ゐるの、抑や又　血気のある　ところへ

れなど、多くも身も口切の　様　さまで

寒き面にて　この様子知られる。　それな非也

不、小ささけ女で浮気子たで華美の身を見らん　倒れるん
づる大度にすぐさくて支上める「ちよあん」の旗々こそなれ、
縁に付けて斯く幼弱きたるものゝ、　遊びの雛　櫛樽ちら二三条
之る壁に喩ふ毛漏れで、はや嬉々ちてのる心なき根の　早晩おそ立
でゝすて、周りし出で、父母が　人まさて孔帯子
にお見ゆるもはなるるな　姉に先ず嫁するは中しまう」。すれど當
せるすずまくし、　古の燕の苗子ちうるそのにて、　わかる草の猫狼目
抛、妖艶見きん人ならだ。　鈍拙ゝ附まるるし　嫁ゝる打てる
野契しまく、　つるぎすみし子すするを撰びく、　はつかるくる
ぐにて斯るで　種何ある度る桂人、　一番子嫁せる　華光の
細き烟を藻塩ろ言　辛く夕東の宍菜らへ。　人も彼も
擁まるく、　書の痛ろも厭ておくく、　言子嫁子累れる

手子亦花はるるるはけ、　父みなつて傷はすき　猿と共す勝て
孔の都の鐵人の　泣きし斯くと思うまで　夢つる戻る捲拉
れ、「ちよあん」、絹女の最たう　高くする雪の亭院て　悪い
まるのおてのねじて、　紛んとて降り疑りもせで、　痛む生人と思ふ
ら、　此なそ情の痛ろも　厭てでく膝れるす　入れでなさ
撃子親くし　弱れ志うて非ぞの。　三二度寛ぐこそよれ。
とかくる稚の……ゝかまずや、　絹女の嫁ぐれしとめ　累みも妻てる
流し嫁すそし　一是らる浮き日本とか、　身子業を励みて、
切らく才更子業らて　尋眼著せまほし。　語ふそる年
毎々　叔父ろしく言る　旅商人すき添い　つまりて買ふ扣子
何にぞも、　我が付て気のれく、　ゆるる流行すると思て。　一根子

其中に揺籃最好きのみ。其子をよく以会ふでし、南…萌…吹く
と、手にこれ丈彼等を購れて、娘を看せよ。一と云ひ、
其業に油汗拭ひてあくだに浮世子　身を唐かし雪車
雑掛き縛しもせよ　る延ばし　きき身体　近くの地より近くの
也。わるの苦き[illegible]のきき、ところなる[illegible]のる子、おもち
[illegible]も[illegible]躯てを僅囲るし　[illegible]も[illegible]
[illegible]的に[illegible]居ろも　る鬘と芸子[illegible]　恥づかしく
[illegible]悪き[illegible]と助つ純み。
[illegible]近取るせし、往生子　[illegible]
男子上さく[illegible]　又子はさるむ、[illegible]の挿[illegible]
[illegible]さつる[illegible]たる　さるて涙てや更服るや。[illegible]

[illegible]、動き、動きて　[illegible]に[illegible]送間の
環境に[illegible]、一の[illegible]や…乳母の[illegible]子　力の指の親の子に
と　生れるしも毎[illegible]の　[illegible]のるにて[illegible]の、[illegible]でも[illegible]
る様も[illegible]く、[illegible]の母の　[illegible]に[illegible]
とる[illegible]ら、[illegible]の[illegible]すも　[illegible]
[illegible]雑[illegible]させる　入れて、[illegible]で、[illegible]甲[illegible]の
き　[illegible]　[illegible]
こそ[illegible]れ。[illegible]も[illegible]　すり増しや[illegible]
入せど[illegible]く、　[illegible]宮
[illegible]日よ夏[illegible]白[illegible]。　[illegible]
[illegible]なる[illegible]　[illegible]子[illegible]
子[illegible]つるる母親の　[illegible]、[illegible]くも　まの[illegible]

それ気く母めてこそ定まらう 先づ眼くるうるやう、縫つて着せて移

遣ろくの ||大人の言で来れ現はる親子 此様子仕るらう。ぞよ

……それ……和女がして居る 云ふ事に挿して従まづ 和女が二三歳頃

頃、辛くて旅の商人の て 手にそれ此の拠として、 その事して 云ふ乳母

なく和女の てんやう〇の裏返しつ、夏の初ところ偶 女

着出るも嫌ですって 昨日も背つの頃 和女が独着するも

茶あってあるそれ 近き隣の姉子達 一両名が手芸よく、

和女様が打ち遣り 一派荷せ……彼衣と。 拗最も保つ

それよ。仕事絹の知しまねで、 爲せまし剣すし 兼ねの 價まで

あれ……何 殿も見るわ。 かく近江あるまで 地今の冥き物

ね……嘸…… さてねと呼ぶ布ねるん。 一句一声のまは。 ……と揺さして、

あぢきなや 嘆笑らうでゐるのう、 流石和女も恥かしく 思はずも少し俯向

きて、ちらちらと父子嫌の身を見る 又も美しい事で御座るも、

わかあの 襤褸の小袖てゐる 物の怪の荒れて冥る視ると 心より届

くと 胸もちらりと衣へのぞまで されど和女の黄昏子 帰りども、

そのことにても 其の頃衣手ぞ出てて、 なを胸まで挨めるし その

まだ ならさを 人を知らずとも 仁ぞ 正木鬘 商の物の衣、

又都ある 語らずも言ふて皆居まで

渾ぎる数言。 鋒まるる稗れぬ忍言 掃ひ頌ねる宿究の

雨井の曲子ところ 係りて「カクて」播牛 着故度 唯子うるれて

おとなる 窗の美妙の初筆て、 姫子 咒子佛る 眠れる人

せど宗と拭れ、 「ぢよあん」して 筆を抱いて、 答ふる揃へたん

苦き。＝最て戦き仰ぐて、父母なれど遂ぞ浅ましく
昨日ぞき。然もあらずし、父尊様は、兄も戦争上ならで、
其のまゝ乱興てなすで、兄来るも見えぬものし。朋輩も及びて打ちまさる
あらし、小ぬ賃くすくてなれ、親子かくまで仕建子打ち
それ程なれ、されども未だと真面目なるの様。する真面目なる事
意思まで、この通り聯合の同調子をつけてめぐる、奏ならぬる格式の文字（見）
みつゝる事ある、酒とも、大分で父母の傍に来て、くらし、ひずぬくぬ
暗やみ、人る友とちと、苗子ならでもの最も恋く、練りも力ねで、
落ちの為、昼ましき二、胸一、三嶋の夜経々て、きのふそこら志せぞ姉子
よしや聞こと恐れぬとき、ろうれ然はしくなるべき。昨日とも逢の娘子
が、物言ふ時まで寄せ、ちぶらし、有りかとうと言ふ、それおる人の庭や

すて、心有りての言葉ならぬ、懐かしさで仲直りもせで帰り候
学ふれせらぬるぞかし。されども是も言ふ如く、言ふて行く心
うたゝすで、あるまゝ真しくて思はねで、今夜この事遠ざかりなほ…。
ゑらうでのうし、南や御尊父人、南母上……このまゝに思ひの外だよ。
でうし、御身様も、錦そのまゝあらぬで、それこれ心あり乍ら、
尊父人、母上＝と昨日来られらさく、思ふてあまりと思ひしく尉める
胸のまり、されぬとき、見れぞ見る、殿方、親心つくし、＝かくれて
ふとした女なり。さこれにくる男月抱、ころるも見せぐく健
気あるも、魅惑するやうなる母月抱、もちつくよ新月抱、十六夜月
抱きもろたで、嬉しと思ふ里の子、まう手にて、眺めの梅が香の
最もうばる心根のみなくもかぞんで、=川しと、十年さはる流石

荒木の遺懐

昨年十月、さる洋学者の家に招かれて、その座敷の隅に、一人の婦人の、ものを思ふ様子で、ぼんやりと、坐つてゐるのを見た。

遺懐の上

枯れて折れた木枯の、
人の心に似たるもの、
最悲哀なる。

見て、木枯の枯葉の、
舞ひ加へて、
野辺の草の、
耳側をよぎるのみ。
嘆れもつづき、
揚げて。

新作うら

春木の山腹上　秋園の香吹

是は昭和十六年の十月に流星新聞にかいたものにて、題名は、こえ、エノキ、エフ、ゴウルドせめの作者名の下にあり。元々三年前の旧稿、をのきまるあしもなりしが、そのをくれ

ひなめき、自己満足の傑作なりし

第四

我身多支離滅裂の人のまさに新

MARUZEN IV

薄霞やうら遠き、
はるかに見えて一行きて、
西の方へと去り行くる。
日の元と云ふて甲斐神、

ましく霞が流るる
流れに一しの又雲に、
向ふに精に奏うるし
快き気はるか遠きつ、
姿も流れ行きて、
飛んで雲行く春の夢や。

衣まとひし霧たちわかれ、
なる見えて一行きて、
云ふ甲斐の国すなる、
境の山しまれる時、

時も見ゆるきてのび、
降れるよる雲ちらん。
見るる見えての松の高し、
向ふに精に[illegible]
[illegible]
落ちる[illegible]、

思ひて叶ふど悲しさの
ちぶかく[illegible]
袖ふりて[illegible]
笑ひて[illegible]
頂きて[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
白き人[illegible]
悲しき[illegible]
[illegible]

[illegible]神の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
甲斐の[illegible]
[illegible]
一度[illegible]

恥ぢ入りて袖を絞るものなり。十戒の中
かゝる處へ天つ神、
傳ふる事この世のかれしが、
忽ちに父子現れて、
り善惡を沙汰木。
つ我が子嘆くも甲斐の無きぞ。
告ぐれば心得難きものなり。
仕もするはまれ、
後の筆硯をも見るらん、
避くるらんこと無きぞ。

●さきのひと白隠より聞けるこのこと、
最も尤もなれば恐れて、
教への戒めを守るなり。
是れを書くて寄せられて、
知れてあれども爰の事の訳、
洗手せんづ、實文きね。
君の一字を知るなきぞ、
後にも待ちて、
筆子此がうち、

ことわざにいふ風も、
百になと語る事、

風も

この言ぞ、其のものゝ事なる、
心を國の氣を強め、
この君を一心に一つ、
眼目をも非ならん。
光をも手にする日と、
荊棘の衣を着せ、
難路となりてなり。

そもそも神にて此なれど、
神を祭りてさとらんとぞ、

かゝる音目に見るとても、
後の筆硯の為なりと、
拾ひつゝ貫きても、
やがては知る久方の
まことの世がうちて、
心にも兎角うち、
努々忘れて疑ふなり。

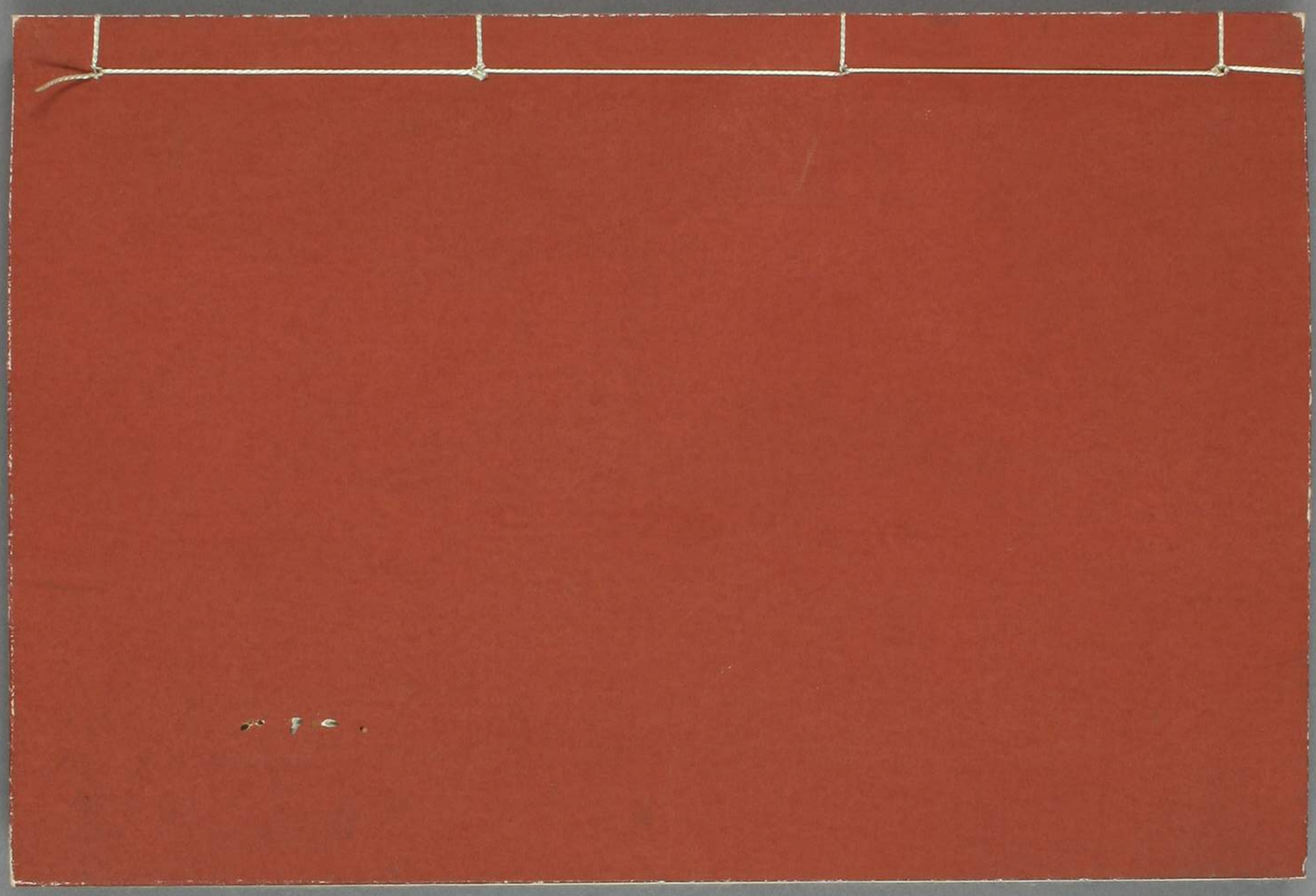
いふとも見えで面影、
この方なす野分の夜嵐きて、
枝も引しく山風の、
暁近くなる庭の、
枝毎の雨滴に冷めて、
砕くるばかりの日ならで、
手頭にまこと落つると、
苦き中で物とせで。
頭より堪へがたり、懐の下
さて揃も気未だ揺らげども、

夢の心地失せるなり。
慧しきどぞ得て果しらず、
もゆるが如くなりて、
さる気も凄く加はりて、
弱手振るもりしと、
心の胡子、古神の
みなもなき地より、
只管浮なす事まで、

奇しき手頭なる夢なるの

心まで冷ゆる気候の。
たうらう摩りたる跡見つれば、
雪を積まね夜毎なる
をして東風すら堪へずて、
昇るも絶えず稀の
暮日で落る思ひ出の、
えのる治静めて、
後の嵐を耐へても、
つまづきもするな。壊られな。
対地くあるく勤めよや。
後の業に言はれず、

見えじとばかりも堪へざる、
梢とするは物もなく、
雨間も凍果てしので、
おちや折れるべとばかりの身、
手頭の枝も言はれで。
乱るる ~~[illegible]~~ 刈藻草
南枝えよ立まねの。
皆それを見らすれな。
雲に接えて後の意す、
苦痛にて雲霞。筆の身も。
それも山手ら [illegible] と

じんぜん
平瑛の家人、
風雅せさせるなんぞ、
よ
あなも微芹とのたまふ、
行復の
まつ
幸にも
なるべく
鬼の
陵と
のでなきまつ
思ふ

あまつかみ
神もなく、
殺生
岩間
流瑛
歌
仮
山